

受胎告知

菊 村 到

1958. 六興出版部刊

受 胎 告 知



昭和33年2月15日 発行

© ¥270

著 者	菊 村 到
発行者	石 井 英 之 助
印刷者	守 安 巖
印刷所	東京印刷株式会社
発行所	株式会社六興出版部

東京都中央区蠣殻町1の12
電話 (67) 4161・4162
振替 口座 東 京 92448

落丁・乱丁本は本社でお取りかいたします。

目次

受胎告知	三
水の都	六〇
揺らぐ帯	八四
ただよう影	一二五
演技	一三二
電話の害について	一五九
弔問	一九〇
殺すなかれ	二二四
葡萄まつり	二三五
あとがき	二七一

受 胎 告 知

扉 装
カ ッ
ット 幀

古 秋
茂 山
田 庄
守 太
介 郎

受胎告知

聖ドン・ボスコ像がほのぐらい採光のなかにゆらめくように浮びあがっている祭壇に向って、司祭のルイジ・シモオネはしずかに一礼した。礼拝堂に足を踏み入れた瞬間から、司祭の身辺にはいわば宗教的な緊張とでもいったようなものが氷のように、するどくはりつめはじめていた。それはおそらくなかば習慣的に、もしくは職業的に身につけてしまった何かなのかもしれない。キリスト受難図をちりばめたステンド・グラスの周囲には一種ひえびえとした明るさが息づき、祈りの気配のとだえた祭壇には、そこだけ時間が歩みをとめてしまったような空虚がおもたくよどんでいた。

ルイジ・シモオネはまだ三十二歳の若さにもかかわらず、鼻の下と顎のまわりとに年寄りくさい赤茶けたひげをもじやもじやとたくわえていた。それはある場合にはひどくとりすましたような印象をかれの表情全体に与え、またあるときにはかなりユウモラスな効果をそえるアク

セントの役目をもつとめていた。かれのとび色の瞳はふとい鉄ぶちの眼鏡のおくで柔和な光をたたえ、どうかすると臆病者のような不安げなまたたきを、せつかちに繰返したりした。われわれ東洋人は一般に白人種の体臭にある種のけもの臭さといったようなものをかぎとりがちであるが、この司祭の場合それが多分に植物的で、たとえばむっと立ちこめる真夏の午後の草いされに近い鬱閉気をもっているように私には思われた。

新聞記者の私は十日ほど前イタリア旅行から帰ったばかりの在日十余年におよぶこのイタリア人司祭からみやげ話を聞くために、サレジオ会武蔵野教会を訪れたのである。

私たちはひとけのない礼拝堂の信者席に腰かけたまま一時間近くも話しあった。にもかかわらず私はかれから目的のみやげ話をほとんど聞きだすことができなかった。私たちは全くべつの話題に熱中しすぎてしまったのだ。その全くべつの話題を思いだすたびに、いまでも私は胸がいたむ。

談たまたま戦争のことにおよぶと司祭は頑丈な上体を小さきみにふるわせ、柔毛の光る両手をはげしくもみしだきながら、「戦争とは青年の犠牲においてのみ可能な犯罪であり、そしてまた神は、青年の犠牲を要求する権利をだれにも、許したまわらない」といった。「ある瞬間、最前線で向きあう兵士たちの胸のなかに神の御心がほんのちよっとだけ影をおとしてくれれば

いいのだが……。そのときおそろくかれらはおたがいの殺人行爲の無意味さをはっきり理解するだろう。そしてかれらは敵も味方も全く同時に銃や剣を投げすてしまうのだ。塹壕から這い出したかれらはもう十年來の知己のごとく、手をにぎり肩をたたきあい、涙を流しながら神に祈りをささげずにはいられなくなるに違いない。戦争挑発者かそんなに声を大にして呼びかけたところで、もはや二度とかれらに銃をとらせることは不可能だ」

戦争に対するかれの憎悪はほとんど生理的なもののようであつた。十余年間も遠い異郷で伝道生活におのれのいっさいを投げこみつつけてきたひとの偏執狂めいたにくしみが、心を灼くほどにたきりたつていた。

私がうつかりあなたのお父さんもやっぱりあなたと同じように神に仕えていたのだろうか、聞く、相手はきまりわるげに氣弱な微笑を浮へながら、カトリノクの司祭は妻をめとることを許されないと答えた。私はなにカひどい失策をしてかしたひとのように顔をすっかりあからめてしまった。私はこの若い司祭の心を傷つけたかもしれない私の全く不注意な問いかけに忤^こぬたるものをおほえなからも、同時にこの男の生理の組織のなかに鬱屈した性欲はどのような質量をもつてうこめいてゐるのだろうか、なまぐさい視線を黒い僧服をゆつたりと着こなし、た六尺^{ろくせき}ちかい相手の巨体にそそきかけずにはいられなかった。このようなストイックな時間の

持続にたえうるのでなければ、とても全人類がいっせいにあらゆる武器を放棄する劇的な瞬間の可能性を信じるなんてことはできないに違いない。あるいは、はけ口をとぎされ、行き場をうしなつた情欲が戦争への憎悪というかたちで吹きあがっているのかもしれない。たしかにかれの戦争否定の意識のなかには、官能のおののきをつたえる陶酔的な熱っぽさがなくもない。

私は相手の僧服をはぎとり、すべっこい皮膚のしたに脈打つ血の音や、いりくんだ筋肉繊維のふるえに、じかにふれてみたい誘惑に胸をゆすぶられた。私たちのだれでもが、ほとんど例外なく生理組織の奥ふかい部分に抱え込んでいるあのリビドオと称する暗い情熱をどうやら私たちの場合とは全く違った仕方でもなくとりひしぎ、くみふせているらしい司祭の内部の力学的緊張が私を打ちのめすのであろうか。かれが礼拝堂に、すがたをあらわした瞬間かれの黒衣の襷々から這いのぼり、私をおしつんできたほとんど性欲的な神への愛情の気配が私を圧倒するののか。

私たちのあいだに一瞬すべりおちてきた気づまりな沈黙をときほぐそうとするかのように、ルイジ・シモオネはトリノにあるオラトリオの話とか、ラ・チッタ・デ・ラ・ガッツイ子供の町における浮浪児たちの生活ぶりだとかをものしずかに語りはじめた。けれどもそれらはいまや全く私の興味をひきはしなかった。

《しかし性欲をおさえつけるのは、やってみれば案外たやすいことなのかもしれない》と私は考えてみた。《とりわけこの司祭のように宗教的な昂奮に感じやすい人間は、ほんのちょっとした自己暗示の手をかりさえすれば、性欲に締めだしをくわせることぐらいわけはないのだ》どこやら嫌気性植物をさえ思わせる司祭の憂鬱な生理を支配するものは、おそらく迷信的な自己暗示の力であるに違いない。《實際自己暗示とか自己催眠なんてまともな人間のかかるものではないのだから》

「あなたは どうして私が坊主になったのかという点に興味をおもちのようですね」と司祭は他人の内心の秘密を読みとった巫者のような陰気さでいった。さきほどは羞恥で染まらなければならなかった私の顔のいろが、こんどは凍りつきでもしたようにつめたく蒼ざめていくような軽い戦慄が私をとらえた。

「私は十六歳のとき、トリノのサレジオ会神学校へ入りました。なぜでしょう。私は悩んでいたからです。（このときかれは軽い溜息をもらし、ひげにおおわれたうす赤い唇を、ためらいがちにふるわせた）それは性の問題でした。私は自分が木の股から生れてきたわけでもなければ、この国の伝説中の一人物のようにある種の果実から飛びだしてきたんでもないということをはっきり知ったのです。そして私は、つまりこの私という人間は罪において生れたのだとい

う認識をもちはじめました。私には性欲を、ある邪惡なものの意志としてしか理解できなかったのですね。おそらくあなたは笑うかもしれません。けれども信仰の道に入る動機が、多くの場合、この性に対する素朴な潔癖感とむすびついている事実をうごかすことはできません」

「性の問題に対するそのような否定的な態度はいまでも変わりませんか」

「さあ、それはむずかしいことだ」司祭は声をひそめ、それから妙にだらしなく唇をゆがめてほくえんだ。その微笑がひどく不敵なもののような印象で私に迫った。「信仰に入ってから、しばらくして私は自分の考えかたがまちがっていたのではないかという疑いをもちはじめました。性に対しても寛容な気分が私のなかにひろがってきたのです。私はひどく調和をうしない、私を支えていたものが根柢からゆらぎはじめたような不安にとらわれました。けれども気がついてみれば、私にとってそんなことはもうどうでもよくなっていたんです。ここどころの氣持がちよっと説明しにくいのだけれども……。つまり性の問題は、ただ私を信仰にみちびく動機としてのみ存在理由をもっていたのであり、帰依してしまつた以上、それにはもう一顧もあたえる必要がないのだと悟つたわけです。ある種の人々はこういう態度を宗教家の樂天主義といつたようなことばで批評するようですが、たしかにその通りで坊主になつてしまえば、万事

につけてのんきでさっぱりとできるものなんです」

「しかしそれによって性欲そのものを抹殺することはできないでしょう」と私は相手に肩すかしをくわされたようないまいましさをおぼえていった。

「生理的には、ね。だが心理的には、ほぼ完全に性欲を封じこめることができます。性ってやつはより多く心理の領域にかかわっているものなんだということを忘れてはいけません。性欲それじたいはちっとも人間を悩ましたり困らしたりなんかしませんよ。意識がこいつをゆがめちまうだけのことです。性欲に対してのんきにさえしていればなんのことはないのです。つまりのんきになることですね」

「でもぼくらの素人考えでは、たえず人間的な苦悩に裏打ちされた信仰生活でなければ無意味なような気がします……」

「たしかにそれは素人考えというものでしょう。苦悩によって人間が高められるものだという考えかたにとられすぎてはいけませんね。悲哀だとか苦悩だとかの効力を素朴に信じきって、これに甘えかかるということはたいへんな楽天主義ですよ。悩んだりつまずいたりするのは無信仰の時代だけのことなんです。いまの私はもうのんきに暮すことにしています。欲望だとか苦しみだとか、そんなものに対してはできるだけ怠けものになるほうがいいですね」

植物的な体臭をもったこの青年司祭にふっと私は奇妙に人なつっこいものを感じながらも、なおかれのこのような思想は世捨人の片意地な自己韜晦のように思われてならず、うわべにいあらわされたところのものをそのままのかたちで素直にのみこむわけにはいかないうような気がした。

会話がひとくぎりついたとき、タブウにふれた迷信家を襲う心のいたみにも似たものが私たちを切なくしめつけてくるようだった。私の神経はひどい放蕩三昧にふけたあとのように疲れきっていた。

「ここ狭いでしょ」ルイジ・シモオネは羊皮紙におおわれたバイブルの頁を細長い指さきでぎこちなくまさぐりながら、精一ぱいの明るさをくちもとに浮べた。

「来年のクリスマスまでにはもっと大きな礼拝堂を建てることになっています。これではまるでキリストの生れた厩とあまり変らないですね。この倍以上もあるお堂で真夜中に荘厳ミサをします。ぜひおでかけ下さい」

別れしなに見た司祭の眼はひどくものかなしげな光をおびていた。聖燭の灯明りを浴びて蠟細工のなめらかな肌を妙になまなましく浮きださせたまま、連禱と聖歌がほとんど肉感的な重量をたたえて、うずまき、ひしめく祭壇の中央で、じっと何かに耐えているようなドン・ボス

コ像の幻影を私はその腫のおくに見たと思った。

社に戻ると、編集局の前の長椅子で啓子が私を待っていた。啓子がそうやって私を待っているということが私にある異常を予感させた。私はインタビュウの原稿をそうそうにまとめあげると、啓子をつれて外にでた。

「忙しいんでしょ」と啓子は鼻にかかったような声でいった。もちろんまだ夕刊のしめきり時間がすんでいないので、やたらに社をはずして出あるくわけにもいれないが、三十分ぐらいならかまわないというと、彼女は「そう」とつぶやき、おもしろい溜息をついた。

きょうの彼女にはどこか異様なものがまつわりついているようで、それが私を圧迫した。

まちには光があふれていた。光と光がかさなりあつて、まち全体を大きな光の暈のなかにのみこんでしまっているようなめくるめきが私を見舞った。けれども私の内部にまであかるい光の微粒子はとけこんできたわけではない。それにまちはかなり寒かった。私は啓子と私とにかかわる何かに、その寒さの原因があるのかもしれないと考えたりした。

私は妙に沈みこんだ気持ちのまま啓子と肩をならべてあるいていった。彼女は人通りのとだえたあたりを見はからうと、私の指に自分のつめたい指さきをいつものやりかたでからめてきて、

ぎゅっと握った。

「私、どうもからだの調子がおかしいのよ」と彼女は声をおとしていった。

彼女の指は私の指から一本一本はなれていった。私はふっと歩みをとめてしまった。けれどもそれは彼女のささやきが私に強い衝撃をあたえたからというわけではない。彼女のことばは私の内部にかなり深く、するどく突きささってきはしたが、このとき私が足をとめたのは、予想される話題の性質上、いつもの喫茶店にいくのをやめて方向を転ずる必要を感じたからにほかならない。

私たちは並木通りをちょっと横にはいったあまりはやりそうもない中華料理店をえらんだ。

私たちのほかに客のかげも見あたらず、さむざむとしずまり返っていた。ここでならどんなに秘密の話題をとりあげたところで、私たちが傷つくということはありません。

「みてもらったの？」と私はいきなり話の核心に踏みこむ姿勢をとった。彼女が妊娠の兆候とうたがわしいからだの変調を訴えてから私たちはおたがいに申しあわせたように、一言もことばをかわさず、それぞれの思いにとじこもっていたのだ。

彼女はだれよりもさきにあなたのところにかけつけたのよといった。どうかすると私のみだれた視線は彼女の下腹のあたりへ落ちていきがちだった。このときの私の気持は、すっかりか

きみたされ、平衡をうしない、あいまいで陰鬱で意地わるいもののかげに、あますところなくおおいつくされてしまっているようだった。もしかしたらもう啓子の胎内で、生意気にも生命の欠片にすかりつきはしめているのかもしれない《もう一人の私》の存在か私をおひやかすのた。その《もう一人の私》の誕生はひとくすはらしいことのようにも、また限りなくいまわしいことのようにも思われ、私はふたつの感情のあいたを不器用にころげまわるほか手はなさそうだった。かつて私は自分の生涯における、《もう一人の私》とのこのような出会いを予期していたであろうか。

たかつきの瞬間ふとほんどうにこれはおれの子なのたろうかという疑念が私のうえに落ちてきた。それはそう考えるたけて私に突きさすような屈辱のいたみをもたらさすにはおかなかった。私はそのような疑念からは強いておもてをそむけようとしたか、とちらを向いても、ふいに鼻さきに暗い壁のような重苦しさをそいつは立ちふさかっていた。

《なせもつと早くこのことに思いおよはなかったのたろう》私は血の気のひく思いでしつと内心の動揺にたえていた。

そのときすんぐりした頬のあかい小娘か、ラアメンのどんぶりをはこんてきた。私はなにげなく彼女の右手のひとつし指か第二関節のあたりからたちきられているのを見てしまい、くっ